昭和42年2月24日東京都特殊郵便物 昭和40年3月8日第三種郵便物認可（3の日発行）

☆帝国主義国、後進国、「労働者国家」
三ブロック階級闘争を
世界プロ独—世界共産主義の勝利へ！
共産主義者同盟

7月13日
毎月3回 3の日発行
第271号
編集発行人 鹿島 昴
一部 40円
購読料20回1,000円（〒共）

戦旗

戦旗社
東京都千代田区三崎町2—7—6滝沢ビル内電話代表
03(264)2962 振替 東京76115

7・16 日本反帝戦線第二回大会第一日
赤羽区民会館
7・17 大会第二日
小岩区民会館

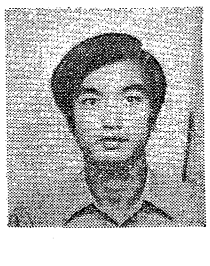
七二年自衛隊沖縄派兵阻止に向け

16—17 反帝戦線第二回大会に総結集せよ

七月五日小西叛軍裁判闘争・新潟大前での集会

日本反帝戦線議長アピール

組織的前進の成果に踏まえ全力量を二回大会の成功へ



I

全世界を獲得するその日を目指し、日夜、各戦線で闘いを展開しているわが日本反帝戦線の同志諸君兄弟諸君。

「党の革命」を完遂し、「党としての闘い」を五—六月沖縄闘争における権力との非和解的闘いとして、権力的武装闘争の全面的展開にむけた、ささやかではあるがしかし巨大な意義をもった第一歩をふみだしたわが日本反帝戦線の犠牲を恐れぬ闘いに感動共感し、今後の闘いに注目している戦闘的労働者・学生諸君！

すでに「戦旗」紙上等で明らかにしてある如く、日本反帝戦線第二回大会を来たる十六、十七日の両日、首都東京において開催する。「戦旗」前号において、この大会に向けた基調的な提案がなされており、そこでも確認されている如く、今二回大会は、❶「党の革命」の完遂という偉大な成果の上に開催されること、❷しかも、全国各地から同志が結集してくること、❸加えて三里塚第一次決戦に始まり、「沖縄返還協定」調印実力阻止闘争へと至る今春夏闘争の権力的武装闘争としての貫徹をうけ開催されること、等の意義を有しているばかりでなく、と同時に、第二回大会は次のような重大な任務を課せられているのである❹全共闘—反戦（所謂八派共闘）のドラスティックな分解過程の渦中、今回の大会が開催される以上、当然のこととして、反帝統一戦線の再編止揚の方向性を鮮明にし、具体化することを目下の階級闘争は我々に問うているのであり、❺かつ、当面する我々の最大の課題である七二年自衛隊沖縄派兵阻止闘争を文字通り実力闘争として展開し、「第二の十・八」を実現することを全国的に意志統一し、またそのためには今から何を準備しなければならないのか、等の諸任務が、第二回大会には課せられているのである。

以上の如き意義と任務をもった極めて重要な（誇張をおそれずにいえば、歴史的意義をもった）日本反帝戦線第二回大会への全国からの総結集を心から訴えたい。

II

昨年七月二五—二六日の日本反帝戦線結成大会は「党の革命」の一定の前進の過程で、すなわち、それ以前に情況派・叛旗派を放逐しつつも、後に野合右派として我々に敵対してきた部分をも内包しつつ、開催された。

六九年四・二八闘争敗北の総括をめぐる同盟内論争にあって、即自的軍事派＝赤軍派の対極として（その実、この両者は大衆運動主義というメダルの裏表の関係にあったのだが）一貫（？）して軍事反対派としてあった情況派・叛旗派は、就中松本某を頭にいただく情況派は社学同と旧共青同との革命的統合＝新共青同結成に頑なにも反対し、又叛旗派にあっても、その軍事反対派的本質故に、新共青同結成にはともかく賛成しつつも「ＡＩＦ（反帝戦線）は軍事機能をも担う労働者政治組織＝ＫＬＭ（共青同）の戦闘組織としての表現であり、従って直接の軍事組織として形成されているわけではないが、単なる大衆闘争機関でもない」（「理論戦線」九号）という我々の主張に真向から反対し、ＡＩＦは地区大衆闘争機関であるべきだと頑なに言い張っていたのだが、我々による「党の革命」の非和解的貫徹により、すなわち七〇年六月十一日の共産同政治集会におけるゲバルト、その後数度に亘るゲバルトにより、この軍事反対派は我が同盟から完全に放逐されたのであり、又この「党の革命」の一定の前進によってこそはじめて日本反帝戦線結成大会は開催されたのである。

このように日本反帝戦線の結成に至るまでには、軍事反対派両派とのゲバルトを含む熾烈な党内—分派—党派闘争の貫徹（「党の革命」）があったのであるが、この「党の革命」を断乎として貫徹しきったのは唯一我々（当時の首都圏西部地区党を中心とした部分）のみであって、後に野合右派となった関西地区派・左派派・仏派は、理論的には我々の内容を承認し、実践的にはおずおずと追随してきたのみであったのだ。

しかし、我々は当時未だ党への飛躍を完全になしとげえず、最も有力なフラクションという地位にとどまっていたが故に、結成大会はこのような部分をもその内に包んでもたれたのであった。

以上のような一定の限界を孕みながらも、日本反帝戦線結成大会は我々の完全なヘゲモニーによって準備され開催され、成功裡のうちに日本反帝戦線の結成を克ち取ったのである。

我々は大会で決定された方針に則っとり、秋期より教育闘争に全面的に取組む（この成果が昨年十二月九日の全国教育連絡会議の結成として結実したことは周知のことである）と同時に、最も有力なフラクションから党への飛躍という偉大にして困難な事業にただちに着手した。

この我々によるフラクションから党への飛躍＝党組織建設の開始は、おのずと「党の革命」のより一層の貫徹、他フラクとの党争、ヘゲモニー争いの激化を示さずにはおかない。

綱領的内容にかかわるイデオロギー論争の組織的展開を避け我々の打ち出す政治路線・闘争方針に対し、それに代る路線、方針を一切提起せず、影で部分的ケチつけをおこないつつ、おずおずと追随してくることによってのみ延命をはかってきた小官僚どもに率いられてきた関西地区派・左派派・仏派その他弱小諸グループは、我々のこの大胆な「党の革命」の貫徹に対し真向からそれを受けるのではなく、ただただあわてふためき、極めて非組織的に自派フラクの機関誌「蜂火」、「左派」、「鉄の[illegible]」等をこっそりと発行したが、そのあまりにも拙い内容（？）が我々によって批判され、暴露されることにより、次々と組織から召還し、タコ壺化していったのである。

このようにしてタコ壺化し、孤立感にさいなまれはじめた彼ら小官僚どもは、それまでの「たがい」の宿命を忘れ、泣きわめきながら抱きあい、「レーニン主義」（我々）に対する蜂起」の宣言をしたのが、昨年の十二・一八デッチアゲ政治集会であり、約半年間に亘る準備をして、それを実行したのが今年四・二八であったが、彼らの我々に対する「蜂起」は我々反帝戦線の革命的鉄槌によって、一瞬のうちに失敗してしまったのである。

かくして、二年にも亘らんとする「党の革命」は、我々の手によって完遂されたのである。

将に来たる日本反帝戦線第二回大会は、この「党の革命」の完遂という偉大な成果の上に開催される正に意義ある大会なのである。

III

前述の「党の革命」の貫徹の過程は我々のフラクションから党への飛躍的前進の過程であったと同時に、一地区党（首都圏西部地区党）から全国党への全国的拡大でもあったのであり、将にこの期間は、レーニン主義を導きの糸とした全国単一党の骨格形成の過程でこそあったのである。

昨年四月、すでに完全に潰えつつきてしまった第二次ブントのその灰のなかから、不死鳥の如く甦り、第三次の第三ブント建設にむけ、首都圏西部地区を拠点として革命的フラクションを結成した我々は、「党の革命」をまず軍事反対派両派、そして次に野合右派に対し、貫徹すると共に、当時、中央指導部の弱体、我々による「党の革命」の未貫徹に規定され、まったくの地域分散主義的傾向にあった否定的な全国情況の止揚にむけレーニン主義をその導きの糸として、全国単一党形成の困難ではあるが、偉大な任務に着手したのであった。この全国単一党形成という困難かつ偉大な事業は、野合右派による敵対妨害をはじめとして多くの障害にぶつかりながらも一歩一歩着実に前進し、すでに本年四・二八闘争を前にして、その一定の成果を全国党の骨格形成としてかちとり、しかもそれは第二ブントのそれのように地域分散主義自体を残存させたままの連合党的全国党ではなく、そのような傾向の残存を一切許さぬレーニン主義的中央集権的単一党として、その基本骨格を一応確立したのである。

その後も全国単一党の形成の任務は、粘り強く遂行され、現在次のような地平にまで到達している。

北海道では、札幌、旭川、北見等で叛旗派崩れの自称「独立社学同」を完全に一掃し、野合右派の介入を一切許さず、将しく北海道における唯一のブントとして、十数年間にわたって北海道の階級闘争を日和見主義的に歪曲し続けてきた「主流派」＝革マル派との党派ゲバルトを、諸派の最先頭に立って展開し、遠からぬ将来北海道における第一党派になるまでに我々は組織的伸長をとげている。

東北地方では、若き同志達が、第二次ブントの地方的残りカス＝統一派との熾烈な党派闘争を勝利的に展開しており、北陸地方では、小西叛軍裁判闘争を契機として新潟に建設されたケルンが、フロントをはじめとする諸派との党派闘争を貫徹しつつ強化されている。

関東地方では、首都圏において唯一建設が遅れていた埼玉に労働者を中心としたケルンが創出され、これによって首都圏は全地区に我々の拠点が形成されたことになり、また今まで中核の圧倒的ヘゲモニー下にあった群馬でも我々の部隊が、原則的な大衆運動の展開と中核批判を媒介として組織的伸長著しく、加えて栃木でも新たにケルンが建設された。

東海地方では、名古屋を中心としてこの間、関西地区派と野合した旧愛知県委員会の小官僚どもとの党派闘争を展開してきたが、四・二八を契機として我々が主導的に勝利し、彼らを完全に現実の階級闘争から放逐し、現在、この我々の「党の革命」の間隙をぬって、一定の伸長をなしてきたハイエナ集団＝革マル派との党派闘争を断乎貫徹しつつ、沖縄闘争を中心とした大衆運動を組織化することによって、組織的前進拡大を遂げてきている。

関西地区派の残った最後の拠点である関西地方においても、京都を中心に我々の部隊は着実に伸長しつつあり、近い将来必ずしや公然と登場し、タコ壺化した関西地区派をこの地上から完全に抹殺するであろう。

中国地方にあっては、鳥取・山口を拠点として野合右派の介入を一切寄せつけず、組織的前進を遂げており、又香川においてもケルンが建設されつつある。

九州地方では、福岡を中心として我々の組織的躍進著しく、我々のヘゲモニーによって全九州叛軍連絡会議（準）を結成し、これを媒介として九州全体の階級闘争を我々が領導していくといった構が形成されつつあり、必ずや七二年自衛隊沖縄派兵阻止闘争を完全に保証しきり、九州における主流派として闘い抜くであろう。

以上みてきた全国単一党の骨格の確立という我々の苦闘のささやかな、しかし計り知れない意義のある成果の上にこそ、今回の日本反帝戦線第二回大会は開催されるのであり、全国の同志諸君はこの大会に結集して、この我々自身の血と汗の成果を確認すると同時に「発展と訓練と規律」のレーニン主義的全国単一党の確立、より一層の強化に向け、再度の強固な意志統一を計っていく必要がある。

IV

「党の革命」の完遂、全国単一党の骨格形成という「党のための闘い」の飛躍的前進により、我々は権力との非和解的闘争によって革命の客体的条件を主体的に作り出す闘い＝「党としての闘い」を今春夏闘争において全国的に展開した。

我々は二—三月、第一次強制代執行阻止の三里塚第一次決戦をその第一歩として、それまで「党の革命」の貫徹を第一義的なものとせざるをえなかったが故に十分には展開してきたとはいえなかった「党としての闘い」を、カンパニア主義的にお茶を濁そうとする中核派をはじめとした諸派を尻目に、権力的武装闘争として闘い抜いた。

この[illegible]された「党のための闘い」の更なる前進を受け、五—六月「沖縄返還協定」調印阻止闘争においては、間違いなくこの闘いの突破口を切り拓いた五・二九外務省突入闘争を、我が反帝戦線の選りすぐられた五十数名の突撃部隊によって貫徹し、続く五・三〇闘争を本隊による肉弾戦、別動隊による火焔ビン闘争として公然・非公然闘争の重層的展開によって闘い抜き、調印当日の六・一七闘争を、完全に民族主義・武装放棄主義に転落した中核派、同中核派と訣別し、反議会主義派を宮下公園に結集させ、渋谷において[illegible]・三〇闘争をも凌駕する闘争として爆発し、このように将に「党としての闘い」は圧倒的な前進を遂げたのである。

以上みてきたごとく、二—三月三里塚闘争にはじまり、五—六月「沖縄返還協定」調印実力阻止闘争へと継続的に闘い抜かれ、飛躍深化してきた「党としての闘い」の非和解的展開は、その日和見主義的本質故に権力との闘いを一切組織化できず、そのことを我々に対して内ゲバ（!!）をかけることによってなんとかペイせんとしてきた野合右派に代表されるブント系諸派に対する決定的な打撃となり、又大衆に対しては「やっぱり、ブントだ！」という我々の闘い＝党のイメージを鮮明に焼付け、組織的部分の我々への結集という有利な情況を生みだしている。

多大な犠牲を恐れず闘い抜くことによって、我々自からが主体的に創りだしたこの有利な情況を最大限生かし、今こそ全国的に我々の側に結集させなければならない。

将しく、来たる第二回大会こそこの結集の場としてあるのであり、今春夏の「党としての闘い」の意味を具体的に結実化させる集約の場としてこそあるのである。

全国の同志諸君！兄弟達！戦闘的労働者学生諸君！

再確認しよう。来たる日本反帝戦線第二回大会は、❶「党の革命」の完遂、❷全国単一党の骨格形成❸「党としての闘い」の躍進という結成大会以降一年間の我々の気も狂わんばかりの組織的苦闘によってこそはじめて、準備され、開催されるのである。

以上のことを踏まえ、第二回大会に課せられている任務について簡単に述べておく必要がある。

V

第二回大会は、「沖縄返還協定」調印阻止闘争における沖縄闘争をめぐる路線対立を契機とした八派共闘（この大衆的表現が全共闘—反戦である）のドラスティックな分解過程の渦中、開催されようとしている。

この沖縄闘争論をめぐる路線対立は、中核派の沖縄奪還論をその典型とした一国主義的傾向と、我々の「日米共同反革命前線基地化阻止」を中心としたプロレタリア国際主義的傾向との対立として、以前から八派共闘内部に存在していたのであったが「返還協定」の調印という沖縄闘争の煮詰りのなかで、対立が尖鋭化し、直接的には六・一五における中核派と解放派とのゲバルトを契機として、全共闘—反戦の分裂という事態をとって、組織的分裂にまで至ったのである。このことは、我々がこの間一貫して主張してきた、全共闘—反戦、とりわけ全共闘はその[illegible]（階級制）故に、七〇年階級闘争は担えない、今人民的闘争の質を有したソビエト型組織としての地区共闘でこそが闘われているのだ、ということの正しさを具体的事実をもって示したもの以外のなにものでもない。

このように分解し混迷している反帝統一戦線の再編止揚の方向性は、将しく蜂起の機関としてのソビエト形成に向け、現在的にはソビエト型組織としての地区共闘を各地区に具体的に構築し、武装蜂起—プロレタリア独裁を実現し、担う潮流としての蜂起プロ独派の創出＝蜂起の陣形構築以外ないのである。たしかに我々は、現在解放派、フロントとブロックを形成しているが、しかし、このブロックがストレートに蜂起プロ独派へと発展していくと考えることは一切できず、いわんやこれをアプリオリに蜂起プロ独派と呼称することなど決してできないのである。なぜならば、そもそも解放派は「七〇年代戦線」にみられる如く、やはり本質的に社民左派でしかなく、又フロントとは自己の出自＝構改的体質からぬけだせないのであって（このことは六・一七渋谷における闘い振りが如実に示している）、蜂起プロ独派の創出は、我々のヘゲモニーの下、まったく新しい潮流形成としてしか実現できないのである。

八派共闘の分裂＝反帝統一戦線の分解という流動的な現下の情勢下で開催される第二回大会は、当面解放派・フロント等のブロックを強めつつ（この内で原則的党派闘争を展開することは自明のことである）、中核派との党派闘争を断乎貫徹することによって、新たな潮流＝蜂起プロ独派をソビエト型組織としての地区共闘を実体的に構築していくことによって、創出していくという我々の路線を鮮明にうちだし具体的方策をも確定していくという重要な任務が課せられているのである。

VI

第二回大会の最大の任務は、七二年自衛隊沖縄派兵阻止闘争を文字通り実力阻止闘争として、全組織を賭けて闘い抜くということを一点の曇りなく意志統一することである。

日々激化するアジア階級闘争に対し、共同して反革命的に対処せんと、この間日米両帝国主義が打ち出してきた一連の諸方策（六九年七月グアム・ドクトリン、六九年十一月日米共同声明、七〇年六月安保自動延長等々）の最後の総仕上げとして、沖縄の日米共同反革命前線基地化を目論む、七二年沖縄施政権返還があるのであり、これを実体的に物質化するものとしてこそ、自衛隊の沖縄派兵があるのである。このことをシッカリとおさえておく必要がある。

日帝は、「返還協定」調印に先立つ五月二〇日「自衛隊沖縄配置計画」（防衛庁）を発表し、派兵を第一段階（返還時から半年間）で三千二百名、第二段階（返還時から一年以内）でこれを六千八百人にまで拡大することを明らかにし、すでに北熊本基地では派兵部隊（陸上自衛隊）の編成、訓練が開始されているのである。又、去る六月二九日の日米安保協議委員会で取決められた「沖縄の直接防衛責任の日本国による引受けに関する取決め」で明らかにされた如く、すでに日米両帝国主義間で、沖縄・基地の（共同反革命のための）共同使用についてのボス交がついているのである。このように、日米両帝国主義は七二年沖縄返還、自衛隊派兵に向けた準備を、着々と推し進めている。

我々はすでに九州を中心として、派兵阻止に向けた闘いを開始し、七二年四—七月に予定されている自衛隊沖縄派兵を、あらゆる手段を駆使して、なんとしても阻止する闘いに向け、闘う主体の組織化、主体勢の強化を具体化しつつある。

二面へ続く

新潟現地

五回目の全国叛軍連絡会議

赤ヘル叛軍が基調を刻印

全国の赤ヘルメットの同志諸君ならびに叛軍諸君！去る七・四第五回全国叛軍連絡会議及び七・五第八回小西叛軍裁判闘争が、赤ヘル叛軍の領導の下、闘いぬかれた事をまずもって報告する。

第五回目の全国叛軍連絡会議は全国の叛軍行動委員会、叛軍活動家を総結集して、七月四日新潟大学医学部講堂で開催された。

会議の議題は全国の叛軍活動家の事前の提起と、そして小西三曹の提起により（Ⅰ）金沢、新発田の問題に関する報告—支援体制の強化に向けて（Ⅱ）叛軍情宣行動委の[illegible]会議から全国叛軍連絡会議の強化に向けての提起（Ⅲ）基地調査の中間総括と最終的提起に向けて（Ⅳ）裁判闘争の当面の課題（イ）行政訴訟（ロ）民事・弁護人運動（Ⅴ）叛軍闘争、叛軍行動委運動の展開と諸戦線との結合（Ⅵ）七一年沖縄派兵阻止闘争（イ）具体的方針（ロ）行動提起の以上六点が提起された。（Ⅰ）の金沢の地において新井一士が決起した事はすでに各新聞等において確認されていると思うが事実経過は次のとおりである。六月一七日の金沢の地において返還協定調印阻止闘争が展開されている最中、私服でデモの様子を見ていた新井一士が警務隊に発見され、私服刑事に逮捕され、六月一九日に釈放。その一時間後に懲戒免職となった訳であるが、自衛隊内につれこまれ一切その後の行先が不明とのことである。我々は全国叛軍連絡会議として弁護士の体制を強化し新井一士を一日も早く我々の手に奪還するとともにこの新井一士の決起を全自衛官に宣伝しなければならない。そして又新井一士のお母さんである新井時代さんに激励の手紙をださなくてはならない。住所は石川県加賀市山城温泉—区である。以上の事を全体で確認した。

前回の全国叛軍連絡会議において問題となった裁判支援体制の不十分性と、全国叛軍連絡会議の組織性、闘争の不十分性を総括する中において、全関東叛軍代表者会議において、神田地区叛軍行動委の方より提起された全国叛軍連絡会議の中に叛軍闘争におけるところの専門分野を特に重要に討議する分科会の設置について小西三曹より六つの分科会（1、小西裁判2、基地調査会3、反帝宣、反軍4、隊内工作5、叛軍理論6、沖縄派兵）の設置が提起され、これについては中部地区叛軍行動委、神田地区叛軍行動委より、この分科会の設置の重要性を確認する中において具体的内容、方向性を明らかにし、全体においてそれを確認した。

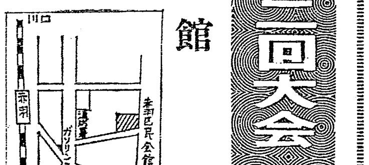
この分科会の責任体制については、すでに全関東叛軍代表者会議の中にも分科会を設置する」が確認されているにもかかわらず、未だそれが具体化されていない現状で再度全関東レベルにおいて十分討議し、その内容を次回の全国叛軍連絡会議において討議する」が確認された。具体的な事には、全体において以下の二点1、全関東叛軍連絡会議に裁判分科会を設置する。2、責任体制については再度全関東叛軍代表者会議において討議する、が確認されているにもかかわらず、千代田反軍、神田反軍（白ヘル）の主張を中心にして責任体制は小西事務所にすべきであると、その具体的内容については一切語らない発言がなされたのであるが、この発言は討議を後退させるもの「責任体制がはっきりしていなければ分科会は設置すべきではない」（千代田反軍）でしかないことは明らかであり、一定に否定されたのであった。

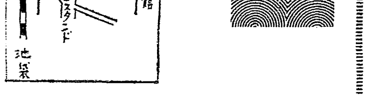
白ヘル系のくだらない発言のため時間がセッパクしたので討論の[illegible]うち帰る者もあると全体で確認し（Ⅵ）の議題について討論がなされ、破産した沖縄奪還論を[illegible]が参加を中心にしつつ説明し、沖縄の位置そのものが日米共同反革命前線基地化されようとしており、我々の闘いはそれに断固たる闘いでなければならないとの発言がなされた。そして全体において八月一〇日に予定されている[illegible]の沖縄派遣を、全国叛軍連絡会議は阻止する闘いを宣言することが確認された。以上の三つの議題に関する討論と、[illegible]を踏まえ、七月五日に第八回小西叛軍裁判闘争が闘われ、我々赤ヘルメットの叛軍行動委は、[illegible]の狂気の弾圧の前に数名の負傷者を出しつつも、圧倒的な、戦闘的なデモンストレーションを最後まで貫徹した事を報告する。

全国の同志諸君、叛軍活動家諸君！叛軍闘争の更なる飛躍をかけ七二年自衛隊派兵を実力で阻止する闘いに全力でうちこもう。全国叛軍行動委とともに権力との非和解的闘いへ！

7・16・17 日本反帝戦線第二回大会

7月16日 赤羽区民会館（開場10時）
17日 小岩区民会館（開場10時）





紙代改訂のお知らせ

「戦旗」購読者のみなさん！

わが第三次共産同の全国政治新聞「戦旗」は、昨年十二月三日号（第二五〇号）より四頁化を断行し、以来、定期刊行を遵守しつつ、二十数号を数えるに至りました。その間四頁化の直後に「党の革命」の非妥協的推進にいたたまれず、わが同盟から逃亡＝脱落した野合右派が、こともあろうに「戦旗」の題字をそっくり真似して二セ「戦旗」を茶番的に時折り発行するという事態が引き起されましたが「党の革命」の完遂に伴うわが同盟、反帝戦線の「党としての闘い」が三里塚第一次、調印阻止闘争を契機に全国的に組織化されるに従い、「第三ブント」の魂を伝えそれへの結集を呼びかける「戦旗」へと紙面の刷新と充実をかちとりつつ今日に至りました。

わが第三次共産同の軍事的進出＝蜂起的武装闘争等の遂行に、諸党派の機関紙活動と紙面の停滞の中にあって、わが「戦旗」の論陣と機関紙活動の躍進をこの間一際立たせるものになったと思います。

しかし、遺憾にも、諸物価の増大は著しいものであり、七月に入ってからは、第三種郵便料金も値上げされ、定期刊行の維持と紙面の更なる充実のためには、紙代の値上げを全購読者のみなさんに要請せざるをえません。従って、次号より以下の如く、紙代の値上げをさせて頂きます。何とぞ購読者各位の御協力をお願いする次第です。

「戦旗」紙代 一部五〇円
二〇回千二百円（〒共）
二部二〇回 二千三百円（〒共）
三部以上一部につき二〇回千百円（〒共）
密封二〇回 千四百円

なお既に旧料金で申込まれている分に関しては、手数ながら、郵送とも残り分を、購読料金で計算させて頂きます。

全九州72年派兵阻止の体勢着々進む

7・4 北熊本

派兵部隊結成に鉄槌

叛軍連絡会議に敵対する中核派を粉砕

五―六月沖縄返還協定調印実力阻止闘争を闘い抜いた全国の革命的労働者、農民、学生の皆さん！　六月十七日返還協定調印の後、日米安保協議委員会（四面参照）・レアード米国防長官の訪日等、七二年沖縄返還―日米共同反革命前線基地化にむけて日米両帝国主義の動きはいよいよ激しくなっている。就中、自衛隊派兵の動きは、九州を中心としてますます露骨になってきている。五―六月闘争を文字通り実力闘争として、実武闘争の飛躍を克ち取ってきた反帝戦線は、九州の地において、七二年派兵阻止の諸準備を、全国叛軍連絡会議の最先頭にたって担っている。今月上旬派兵部隊の結団式が熊本においてなされんとしている。全九州の反帝戦線は、全九州叛軍連絡会議（準）を領導し、革共同両派との党派闘争を熾烈に展開しつつ、そのような権力の策動に対し、鋭い階級的反撃を浴びせ、地区共闘と革命の軍隊をもって派兵を阻止しぬく連続闘争に突入したことを、ここに報告する。

【熊本支局】全国の同志諸君！戦旗読者諸君！

七・一闘争にひき続く七・四北熊本連続闘争の報告をしたい。

当初七二年沖縄返還と同時に三二〇〇名の自衛隊派兵を沖縄にむけてなさんとした日本帝国主義者は、沖縄現地―本土プロレタリアートの革命的高揚を前にし、ますますその反人民性、残虐性をむき出しにし、急遽六八〇〇名への増員をなし、七二年派兵へむけて今着々とその準備をなしている。

今日沖縄派兵の中心的な基地として九州の北熊本―清水基地において沖縄出身者を中心とした派兵部隊が結集しつつあり、派兵部隊の編成が近い将来なされんとしているのである。

米帝の東南アジアからの後退を補充し、同時に日帝自身の侵略反革命＝独自利害の貫徹へむけた一大布石として、この七二年沖縄派兵があることは明白である。それは軍事・外交路線の赤裸々な展開としての確立、産軍複合体の形成、排外主義・国益国防イデオロギーの乱舞、反革命治安体制の飛躍的な強化という、一連の国内再編の一大メルクマールとしてあるのだ。

今日の米軍にかわり自衛隊が、沖縄プロレタリアートの反革命的弾圧にのり出していくことは、今や公然の秘密である。ブル新さえも報じているように、沖縄人民の間で、自衛隊派兵を阻止するという動きが急速に広まり、共産的な闘いのエネルギーに成長せんとしているのである。

七月上旬、九州某所で派兵の先発隊ともいうべきPR部隊の編成がなされ、直ちに沖縄へ送られんとしている時、北熊本基地の重要な位置（沖縄基地の警備、派兵の主力部隊の編成、訓練、陸上自衛隊の派兵基地）がクローズ・アップされてくるのである。

われわれは、七・四闘争を八〇名の部隊で領導し、かかる北熊本基地の派兵にしめる位置を暴露しきり、この九州において問われている叛軍連絡会議の強化から、地区共闘創出という闘いの一大焦点として、北熊本の叛軍闘争を沖縄闘争と結合し自衛隊の沖縄派兵阻止の闘いとして突きあげねばならないことを明かにしたのであった。

花畑公園に結集した四〇〇名の先進的な労働者・学生はかかるわれわれの提起を、われるような拍手でむかえ、赤ヘルこそがこれらの闘いを真に革命的に担いうる唯一の部隊であることが明かとなったのである。

一方、この日の闘いにおいて日本階級闘争にとって、第二の十・八にも匹敵すべき重大な闘いの組織化が革共同両派との熾烈な党派闘争を通して初めて実現しうることが明かにされた。すなわち、七・一革マル派、七・四中核派の武装敵対ということのうちに最も象徴的にそのことは表現されたのである。

七・四闘争は、早朝からのわれわれによる花畑公園の武装制圧によって開始された。すでに諸闘において、九大教養部への中核派の武装敵対を一瞬のうちにズタズタに粉砕しぬくことにより、全面的な党派闘争に突入したわれわれは、「全九州叛軍で北熊本闘争を闘う」という確認もどこへやら、七・四闘争へ至る過程での全九州叛軍の事務局会議、あるいは実行委を党派闘争を理由に全て放棄し勝手に独自で七・四の花畑公園集会を設定し、われわれに敵対せんとしたのであった。

悪名高き沖縄「奪還」論にしがみつき、一国主義的、民族主義的にカンパニア主義的にハネあがることや、自己本位主義によって誇りとしてきた彼等は、七・四熊本に、関西からのゲバルト部隊まで動員しながらも、機動隊という形でしか登場できなかった。しかしわれわれの行動隊の前にはなすすべもなく、われわれが花畑公園を出て基地へのデモに移った後、コソコソと同集会場に入ってきたのであり、遂に総括集会の会場には姿さえ見せることができなかったのである。

全国の同志諸君！

かかる矮小な存在でしかない中核派を完膚なきまでに粉砕し、七二年自衛隊派兵阻止闘争を赤ヘルと炎と鮮血でもって刻印すべく進撃しようではないか。

7・1

派兵阻止連続闘争に突入

敵対する革マル派を追散らす

【熊本支局】全国の同志諸君！戦旗読者諸君！

七・一炎天下、熊本の地においてわが赤ヘルを先頭に闘いぬかれた自衛隊沖縄派兵阻止―北熊本基地解体闘争の報告をします。

返還協定調印阻止闘争の大爆発の中で、われわれに問われたことは、沖縄闘争を、本土への復帰をめぐる問題として一面化することを拒否し、返還という形で物質化される日米両帝国主義による共同反革命前線基地化に対決する闘いとして、「返還」「奪還」派あるいは「即自的返還粉砕」派を止揚する地平において闘いを組織するということであった。

現代過渡期世界における帝国主義の侵略反革命が、反革命同盟内のヘゲモニー再編として対労働者国家、そして後進国民族解放闘争に対する共同反革命の遂行をその内に孕んで運行するということ。この特質を明確に踏まえたわれわれのみが、沖縄闘争を一国主義・民族主義の目玉から見ることや、レーニン帝国主義論の教条的アテハメをもって把えることを止揚しうるのである。

今や返還協定調印から、一気に批准・七二年返還へと着々と進まんとする日帝は、すでにアジア一帯、就中東南アジアへむけたミリタリー・キー・ストーンとしての沖縄基地の再編を基地移管・自衛隊の視察団派遣・PR部隊派遣として着々と進行させんとしている。

この日熊本での闘いは、かかる日帝の動向の集約が、七二年自衛隊派兵として六千八百名に及ぶ帝軍の派兵としてあることを踏え、七二年派兵阻止の第一波闘争として、叛軍闘争を沖縄闘争と結合して闘い抜かれたのであった。一時、熊大学舎前に結集した西日本各地や、九州各地の部隊は、反帝戦線、赤色戦線、叛軍派をはじめとした二百余名で決起集会を貫徹した。一貫して熊本の地における叛軍闘争を唯一責任をもって担ってきた熊本地区叛軍行動委の同志は、次のように提起した。

❶沖縄闘争における今日的核心をはっきりと自衛隊派兵阻止闘争の一点に集約し、断乎とした実力阻止闘争―隊内叛乱と外からの武装闘争との結合として、沖縄人民の上陸阻止闘争と連帯して闘い抜かれねばならないこと。

❷そのような闘いこそ叛軍闘争と沖縄闘争の結合として、地区叛軍連絡会議の強化の下、地区共闘創出へむけ、恒常的武装闘争として六〇年代階級闘争からの一大飛躍を実現させるべく闘い抜かねばならないこと。

❸その場合、就中、一国主義・民族主義に転落され、武闘議会主義へ転落した革共同中核派は、かかる恒常的武装闘争の前進と、反帝統一戦線の再編においては障碍物以外の何物でもなく、古典的に日本階級闘争を固定化せんとする彼等との断乎とした党派闘争が貫徹されなければならない。

❹今、一方ハイエナ的にそこに他党派がいるからという理由だけで、熊本に登場せんとしている革マルの悪意的解体を、早急に実現しなければならない。

発言は圧倒的に支持され、部隊はただちに北熊本基地へのデモに出発した。その時、何を血迷ったか、革マル派全九州の部隊が、コソコソと反共への介入集会を終えて、熊大のわれわれの方へ向ってきたのである。が、ややけた隊列は、熊大前の道路でわれわれと衝突し、彼らの寄せ集めの行動隊三〇名はわが赤ヘル行動隊十名の前に一瞬にして粉砕されたのであった。この時、右翼共労党は、ただもって歩いているだけの角材三〇―四〇本で、革マルと一戦交えることなく通りすぎ、叛軍派は三名ほどが、われわれの行動隊の後にくっついてきただけであった。まさに革共同両派を粉砕し、全九州の闘いを担うのは誰であるかがこの時鮮明になったのである。

北熊本基地ゲート前までの戦闘的なデモと、ゲート前集会を貫徹した赤ヘル部隊は、再度七・四闘いを圧倒的に爆発させることを固く意志一致し、この日の闘いを終えたのである。

全国の同志諸君！戦旗読者諸君！

七二年沖縄自衛隊派兵の基地となる北熊本―清水基地解体闘争を、これまで十数波にわたって取り組んできた全九州反帝戦線と赤ヘル行動委員会は、その総力をもって七二年自衛隊派兵実力阻止の諸準備を着々と進めつつある。就中、PR部隊派遣阻止闘争は、その前哨戦となるであろうし、われわれは、全九州の総力をあげてこれにとり組まんとしている。

沖縄の地においては、第二次の集団撤去作業が、ますますその反人民性をあらわにしつつ進められんとしているし、屋良「革新」行政府は、立法院に対して「集団行進に関する立法」（デモ規制法案）を勧告し、スターリニストの反革命性をいよいよあからさまにしている。このような中で、沖縄人民は自衛隊の上陸阻止にむけて五・一九沖縄ゼネストをはるかに上回るエネルギーを蓄積しつつある。われわれはかかる沖縄人民と革命的に一帯し、「第二の十・八」めざし、すでに進撃を開始した。

全国の同志諸君！戦旗読者諸君！

革共同両派を血の海に沈め、七二年自衛隊派兵阻止闘争へむけて共に進撃せよ！

7・4 厚木基地

自衛隊移管阻止に起つ

全国の同志諸君！七・四厚木基地自衛隊移管―共同使用粉砕闘争が、わが日吉叛軍の同志三〇名を中心として断乎として闘い抜かれたことを報告する。

六月二十五日、日米合同委は七月一日より厚木を初め三沢、立川基地間、厚付の米軍基地の一部自衛隊移管―共同使用を確認し、続いて二十九日、日米安保協議委員会は自衛隊の沖縄配備に関するとりきめを確認したのであった。また七月二日レアード米国防長官の来日等、六月一七日「沖縄返還協定」調印以降この間の政治過程は「本土」―沖縄にわたる共同反革命体制の再編強化へ急ピッチである。

この六月末までの在日米軍一万二千名にのぼる縮少が、昨年十一月の日米安保協議委で確定され、そしてそれが全アジアにわたるニクソンドクトリンの遂行としてある以上、四次防計画を背景とする自衛隊への米軍基地移管はまさしく「沖縄の日米共同反革命前線基地化」をメルクマールとする共同反革命体制の再編強化―日帝の侵略反革命の飛躍的強化を実現する過程に他ならない。厚木基地に関してはその五三％の自衛隊移管というものである。

当日の闘いは、この様な日帝の軍事外交路線の具体的展開と対決し、そして五日から開始される小西叛軍裁判闘争に呼応する闘いとして断乎として闘い抜かれた。巨大なジェット輸送機が舞う神奈川県大和市元大和保健所横公園にて午後二時より日吉叛軍を中心に二〇名の労働者・学生・市民が結集して決起集会が開催された。結集した団体は他に新劇人反戦・世田谷叛軍・東洋大叛軍・ノンセクトグループ・若干名の叛軍派・フロント系諸君である。集会では、「大和をよくする市民の会」の代表は社共の闘争放棄を弾劾し、更に広範な市民を結集して闘うと表明し、日吉叛軍の同志は、中核派系諸君の脱落を弾劾しつつ、自衛隊移管をめぐる共同反革命展開と対決し、七二年沖縄派兵阻止へ向け叛軍闘争の戦列を更に強化しようと呼びかけた。

デモンストレーションは、綾瀬町の四分の三を占める厚木基地の裏ゲート前へ、途中の機動隊の規制をはね返しつつ戦闘的に闘われた。MPと機動隊が固めるゲート前では何回も攻撃的デモを繰り返し、わが日吉叛軍は若グループを領導してその先頭で最後まで戦闘的に闘い抜いたのである。

蘆溝橋三四周年記念

地区実運動の強化を！

7・7

七月七日お茶の水の全電通会館で、東京入管闘の「七・七―蘆溝橋三四周年入管体制打倒を闘おう」集会が約七百名の結集をもって圧倒的に克ち取られた。

現在日帝は、日韓法的地位協定に基づく「協定永住権」の申請＝法第一二六号のなしくずし的解体、そして一方では在日朝鮮人の同化・弾圧を強めつつある。このことは沖縄返還をめぐる国際反革命同盟再編に伴ない、日帝が全面的に韓国の朴軍事政権を擁護しつつ、労働者国家帯と、それに外的にインパクトを受けつつ、現代過渡期世界の中で一切の道をとざされた、後進国人民の武装民族解放闘争の圧殺、そしてこれに呼応する在日朝鮮人民に対しての民族排外的な攻撃をもまきこんだ反革命体制なのである。

われわれは、かかる日帝の軍事外交路線＝侵略反革命に断乎として対決し、日帝のかかる野望を打ち砕いていかねばならない。

集会は、三里塚芝山空港反対同盟、北富士忍草母の会、宮村貞一氏（メッセージ）、沖縄青年委員会、関東部落青年友の会、関東部落研、そして六・三〇[illegible]の夜間デモ禁止に抗議して結成された諸団の連帯アピールに続いて、東京入管闘の横井氏より基調報告がなされ、その中で「一・一六以後権力は南朝鮮人民の排日文化運動として展開されている階級闘争の帰趨と連帯し闘わんとする在日朝鮮人に対して、朝鮮総連の組織解体・民団の呉一派の擁護という形で、在日朝鮮人の生活総体にわたって攻撃をかけてきている。われわれは、一・一六以後の[illegible]の不当分断・攻撃の不[illegible]の主体の確立と、在日朝鮮人の地区実と、在日朝鮮人の政治活動の自由獲得と、外国人学校法案による民族教育の破壊への防衛をもって、糾弾していこう」と発言され、続いて各地区実報告、劉彩品支援会、[illegible]会議、そして在日韓国人（パク・チョンソク）君の就職差別と闘っている「在日朝鮮人への就職差別と闘う連絡会議」からの発言があり、インターの大合唱で集会を終了した。

◇◆◇

七月七日の入管闘争は首都東京を初めとして札幌・名古屋・九州においても革命的に克ち取られた。

名古屋においては、「愛知自立ブント」のダラ幹＝日和見主義分派との党派闘争以降、三月三里塚蜂起を組織し、共産主義を組織する意識の第三次ブント建設にむける意識的前進を克ち取っている名古屋地区反帝戦線は、七・七入管沖縄闘争を激しい風雨をものともせず、野合派を一切寄せつけず、他に分裂集会を持っていた中核派の集会破壊を阻止し、諸派の先頭にたって闘い抜いたのである。

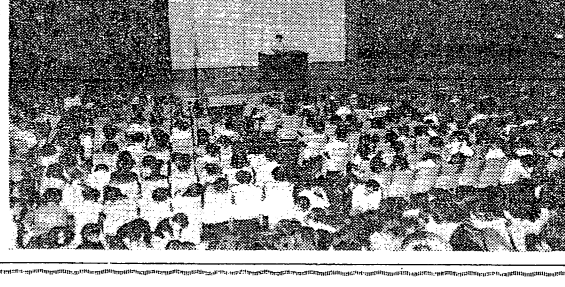
◇◆◇

又、七・一―四派兵阻止・叛軍闘争を闘った九州の反帝戦線は数日前の対中核派との党派闘争における圧倒的勝利にふまえて、中核派の九州最後の拠点、西南大を赤ヘル部隊を先頭に武装制圧し、徒党を蹴散らしきり中核派の自己批判運動を弾劾しぬいて入管闘争を闘い抜いたのである。

◇◆◇

札幌では、七月七日、午後六時より、大通り西六丁目公園において、「蘆溝橋三四周年、七・七入管沖縄札幌総決起集会」が赤ヘル四〇名を先頭に、百数十名の結集により克ち取られた。

（[illegible]）



基調を提起する東京入管闘の横井氏

（一面より）

我々はこの闘争を、六九年秋期安保決戦の敗北の結果作り出された現在の権力との力関係（「密集した反革命」の圧倒的存在）を揺り動かす闘い、すなわち「第二の十・八」として闘い抜かなければならない。将に我々はこの闘いに、全組織力量を賭けて闘い切る決意を打ち固めているのである。

全国の同志が一堂に会する第二回大会において、このことを再度確認し統一する必要がある。

日本反帝戦線の同志諸君！兄弟達！

全国の戦闘的労働者、学生諸君！

以上の諸課題を確認し、来たる十六―十七日の日本反帝戦線第二回大会に全国から総結集せよ！

昭和四六年七月十三日

日本反帝戦線

議長　米田隆介

6・17で重傷者続出

毒ガス使用許すな

六月一七日、沖縄返還協定調印実力阻止闘争の一大爆発が、宮下公園に結集した一万余の戦闘的な労働者学生の闘いによって克ち取られた。当日の闘争において敵権力が示した「革命治安弾圧」の狂乱的なエスカレートをわれわれは決して見過ごすことはできない。

この日、五・二九外務省突入闘争の革命的貫徹以降、日常的武装闘争の新たな地平を着実に克ち取ってきた反帝戦線の果敢な闘いの前進と、これに刺激されつつ、腐敗し空洞化した八派共闘に代わる新たな統一戦線の結成を期待し、宮下公園に結集した無数の労働者・学生の調印実力阻止闘争への決起に恐怖した権力は、ついに毒ガスを無差別に使用しはじめたのである。

従来、機動隊は、二種類の催涙ガスを使用してきた。警視庁のS弾（これは投げ返されることが多々あるので、現在はほとんど使用されていない）と、警視庁のP弾（発射三、四秒後に瞬間的に白煙を吹き出す。現在主にはこれが使用されている）である。いずれも成分は、眼、鼻、喉を一時的に刺激する催涙剤の「クロロアセトフェノン」（略称CN）と考えられている。

ところで、まずこのCN自体に問題がある。というのは、CNは、米軍の毒ガス一覧表のなかに記載されている、れっきとした毒ガスであり、しかも現在ベトナム戦線において「暴動鎮圧用」として使用されている、という代物なのである。その上に、さらに問題となるのは、今回使用されたガス弾には、従来のCN以上の強烈な刺激をもった成分が使用されているのではないかという疑いをもたせるような、いまだかつてない重篤の患者を続出させたことである。

例えば、上野一二八号（女性）の場合、上半身から左足ももにかけて、水疱、全身くただれ、熱も三九度のまま、睡眠・食事もとれず、一週間目には心臓の働きがストップ、尿が出なくなり、生命に危険が出た。ところが、これに対する適切な治療方法が、警察病院ですらわからず、何カ所もの病院をたらい回しにされた。ついに警察が全くのお手上げであることを認めざるを得なくなってから、重態のままで彼女は釈放されたのである。ただただ警察の責任逃れのためだけに。

このように、今回使用されたガス弾は、従来の催涙ガスのように、涙が出、目と鼻が痛くなるとか、せいぜい皮フがヒリヒリするといったものではない。まさに人体の皮膚にあびるとただれたようになり、めまいを起こしたり、一時的呼吸困難に陥る者が出る。そして、即日、あるいは一、二週間たってから、頸、胸全身に広がっていく。リンパ腺がはれ上り、上半身がだるくなり、三八度前後の熱を出し、尿の出が悪くなり、頭痛、かゆみで不眠、食欲不振に陥る。

慈恵医大の井上医師の検査によると、「患者全員に尿と白血球の異状が認められ、また、肝臓やじん臓障害をひき起す可能性がある」とのことである。

これはもはや「催涙」ガスの段階をこえている。明らかに毒ガスである。

かかる毒ガスを、権力―機動隊は、ためらいもなく、まるで雨あられのように乱射したのだ、しかも至近距離からの水平射撃として。

われわれは、六・一五～一七の闘争に対して、七〇年一〇・一一月安保決戦時をしのぐ三日間延べ[illegible]の総合警備本部の設置と、機動隊など八千―一万二千の配置という、警察体制の飛躍的な肥大化、狂暴化のもとで使用された、このような毒ガス使用を決して許さないし、直ちに弾劾しなければならない。

われわれは、毒ガスの実態を人民の前に全面的に暴露し、これを糾弾していくとともに、われわれの日常的武装闘争の更なる前進を勝ちとっていくことをもって、かかる権力の狂乱的な弾圧のエスカレートを粉砕していくであろう。

7・1

佐藤―椎名訪韓阻止

反帝戦線早朝現地で決起

日米共同声明に続いて日米両帝国主義による沖縄の共同反革命前線基地化というドス黒い策動が、六月十七日「返還協定」調印によって、その具体的実現がまたしても大きく進行させられようとした。これに対決する本土―沖縄のプロレタリアート人民の闘いをなんとか圧殺、封じ込めんとする日帝、国家権力は、五―六月返還協定調印阻止の闘いの噴出を、狂暴な弾圧に躍起になることで必死に押えこまんとし狂奔したが沖縄人民十万人の革命的決起とこれに強固に連帯する「本土」の暴力的闘いは、かかる権力の弾圧を突破して燃え拡がり、とりわけ首都における日本反帝戦線の五・二九外務省突入から六・一七日比谷での闘いに至る一連の闘いは、七十年代武装闘争への突破口を切り拓く最も戦闘的、革命的な突出として国家権力を根底から震撼せしめたのであった。

こうしてプロレタリアート人民の反撃をくらい「返還協定」調印にやっとのことでこぎつけた、日本帝国主義は、その上に立って、今度は「佐藤訪韓」―朴政権へのテコ入れによるプロレタリアート人民に対する反革命弾圧を矢つぎばやにかけ、もって民族分断支配を貫徹し、七〇年代侵略反革命の強化を貫かんとしたのである。

これに対し調印阻止闘争の革命的攻勢を踏まえ、佐藤訪韓を阻止する闘いが反帝戦線を最先頭に反帝学評・フロント・赤色戦線・東京人民の労働者学生によって闘い取られた。

六月三〇日の深川公園での闘いに連続する七月一日、早朝六時より、蒲田東公園に結集した戦闘的な労働者、学生七百名は、佐藤訪韓を実力阻止すべく、羽田現地にむけた闘いに先立って集会をかちとっていた。この日、六・一七闘争以来革命的左翼の戦線から脱落し、人民戦線派、武闘議会主義派への転落を自己暴露した中核派[illegible]う会に出てきた。

しかも許せないことには、個人に対するリンチを行った上に物品を奪うといった暴挙を組織的に行ったのである。かかる利敵行為にも等しい反階級的・敵対策動は、彼等の人民戦線派―カンパニア主義への転落とともに鋭く弾劾されなければならない。

[illegible]、中核派のアリバイ的カンパニア闘争への[illegible]を、目にゆい[illegible]闘的な[illegible]を切り[illegible]げた。

[illegible]力は羽田一帯を戒厳令下、放水[illegible]と五十人に及ぶ機動隊で「制圧」し恐怖の弾圧陣を敷き、闘争圧殺に必死になったのであったが、蒲田東公園から萩中公園までの六キロに及ぶデモンストレーションは終始機動隊によるタテ、警棒での挑発、攻撃をはねのけて貫徹された。

なかでも反帝戦線部隊一〇〇名は、蜂起プロ独派の形成をめざす潮流の最左翼として、行動隊の分列行進とジグザグデモによって訪韓阻止闘争の雄叫びを、ひときわ鮮明に示し、七〇年代武装闘争の担い手たる正規軍の質を、結集した労働者、学生、羽田地区の住民の前に明らかにしたのである。

十時過ぎ萩中公園での総括集会を終え、三〇日―一日の羽田闘争等は最後まで闘いぬかれた。これによって、穏健な中核派路線によってもたらされていた階級戦線の混迷は一歩踏み越えられ、八派共闘の解体止揚―蜂起の陣形への再編が更に具体的日程にのぼることとなったのである。

七・五第八回小西叛軍裁判

民衆弁護人を克ち取れ！

小西叛軍裁判はすでに、昨年七月の第一回公判開始以来、今回でほぼ一年、八回の公判を数えるに至っている。

一年前とほとんど変らず、前夜からの裁判所前での泊り込み、そして超満員の傍聴席。

以前は、右翼―大日本生産党が宣伝カーをつかってのデマ宣伝、小西三曹への非難を意図的に行っていたのであるが、それも初めだけで、我々の粘り強い闘いの展開の中でいつしか姿を消してしまった。

公判は定刻より少し遅れて開始された。

冒頭、弁護団側は、前回第七回公判後の五月一四日、下田最高裁判事が、この新潟地裁に来て、裁判官一八名を集めて「協議会」を行った事について、とりわけ、その中で下田判事の訓話の内容について釈明が要求された。

つまり、下田判事は、その席上「裁判官の心得え」について、❶「裁判官は体制的でなければならない」❷「体制を批判するならば裁判官をやめて政治活動を行えばいい」❸「悪法も法の内だ」、等々を各裁判官に訓話し、暗にこの間の最高裁に向けられている下級裁判官の最高裁批判を封じ込めようとしたのである。

弁護団は、この問題について、裁判長は、どのように考えているのか問い正し、[illegible]野裁判長は、「あくまで裁判官の良心に従って公正、適切な裁判を行う」と一般的に答弁したのであるが、下田判事の、この小西裁判への介入の意図は明白であり、今後とも我々は新潟地裁の対応に、監視を強めていく必要があるであろう。

公判は、次に前回の弁護団の十一項目にわたる求釈明要求に対する検察側の釈明に移った。

これは、主要には憲法九条と自衛隊の関係についての釈明を内容とするものであり、戦争・武力の行使・交戦権・戦時国際法との関係等について行なわれた。

この中で、検察側は❶「戦争」とは政府の宣戦布告、宣告をしたものに限る、❷「武力行使」とは「国際紛争の解決をなす武力の行使」の意である、❸自衛隊法七六条「防衛出動」同八八条「武力行使」は、憲法その他の諸規定によって否定されていない、わが国固有のものであり「交戦権」の行使ではない、❹戦時国際法の諸規定は、自衛隊の武力行使においても適用されるものと考える、等と答弁ならぬ答弁が行なわれ、弁護団・傍聴席の憤激をかったのである。

ここにおける検察側の意図は明白である。つまり、ひとつには「戦争」という概念を極めて小さい範囲にとどめ、例えばベトナム戦争・ラオス侵略等は戦争ではないとし、武力行使の範囲を拡大解釈して自衛隊の戦争行為を「武力行使」として隠蔽せんとするものである。

更には戦時国際法が自衛隊にも適用されるとして明らかにした事実は、これまで政府答弁等で、これを否定していただけに、今回のこの言明は極めて注目すべき新たな点である。

戦時国際法は、戦争時における各国間の事前協約としてあり、これを自衛隊においても認めるということは、国際紛争の局面で自衛隊は、他の軍隊と同等の関係にあることを明らかにするものであり、その意味では、自衛隊が国際的な舞台では軍隊としてあることを明確としたのである。

そしてこれは、一方では、自衛隊が戦時国際法をこれまでのように無視することができなくなっていることを示しており、海外派兵・共同軍事行動を、日帝が現実的な課題として、積極的に国際紛争に対する直接的な関係へ関わろうとしていることの証左なのである。

こうして、検察側の釈明は徹頭徹尾、自衛隊の「自衛」のための「武力行使」―戦争遂行を主張し、しかも憲法との関連については全て回避することに終始したのである。

一方、弁護団側の追及も、裁判形式のワク内にとどまることによって有効に展開できず、全面的な憲法論争―違憲論の主張、という当初の意図が充分貫徹されないまま、結局求釈明段階に終止符をうってしまうことになったのである。ここに、現在の裁判における法廷闘争の限界がはっきりと表われている。

小西三曹、内藤功弁護人が、公判終了後における報告集会の席上、これまでの憲法論争・自衛隊の違憲性の追及・自衛隊の実態の暴露ということが、現在の裁判形式の枠内では極めて限界があること、そしてこの限界の突破は、法廷闘争の技術の問題ではなく、現在、革命的に展開されている叛軍行動委員会の闘争の質を、いかに裁判の中に持ち込むのか、あるいは叛軍の闘いの一環としての小西裁判に叛軍行動委の闘う者たちがいかに関わっていくのかが問われているのだと提起されたことは、こうしたこれまでの小西裁判の問題点を明らかにしたものであり、我々はこれに対して明確に応えていかねばならない。

それは、公判の最後の段階で弁護側から提出された一七七人の民衆弁護人選任の要求の闘いである。

裁判において弁護側に認められている特別弁護人選任制度を我々が徹底的に活用し、援用し、そのことによってこれまでの裁判形式を打破した新たな闘いを実現していくということは極めて重要なものとなっている。

とりわけ今回の一七七人の民衆弁護人の要求は、これまで特別弁護人というものが、ほとんど、専門家、学者に限られていたのを、何の専門的知識ももたないがただ小西三曹の革命的闘いの意志をうけ継いで闘っているもの全てを民衆弁護人として要求し、そして闘争主体を裁判の中に送りこんで、裁判闘争の質を法廷内においても貫徹させていくものとしての意味内容を有しているのであり、今後、叛軍行動委の小西裁判への関わりを、かかるものとして法廷内においても追求していく闘いによって、革命的自衛官、小西三曹と固く連帯し、法的制裁を行なおうとする、検察・裁判官に対する公然とした闘いを展開していくことを要望していく必要があるであろう。

6・17の戦士四名起訴さる

直ちに奪還のカンパを！

権力は、六・一七調印実力阻止闘争を、武闘議会主義に転落した中核派と決別し、宮下公園に結集した一万余名の労働者・学生の先頭にたって火炎ビンと旗竿による闘いを貫徹した反帝戦線と赤ヘル数十名に対し、毒ガス（別記事参照）と六十数名に及ぶ不当逮捕という暴挙に出たのであるが、七月九日、更にそのうち四名を起訴したのである。司法の急激な治安強化の中にあって、われわれは、破防法裁判と、小西叛軍裁判の二つの巨大な、権力にとっては最も恐るべき闘争の一周年を迎えんとしている。われわれはこの二つの裁判闘争と固く結合して、起訴者の早期奪還にその総力を傾注しなければならないが、権力に対する攻撃に、日本反帝戦線第二回大会を圧倒的に成功させ、七二年派兵阻止に向けて、恒常的武装闘争の一大飛躍をかちとることは、けだし当然である。

四・五野合派との党派闘争、五・二九外務省突入、五・三〇―六・一七調印実力阻止の起訴者に圧倒的なカンパを！

破防法公判一周年

7・21公判に結集せよ

来る七月二十一日（水）午後一時より、東京地裁七〇一号法廷において、破防法第十一回公判が刑事第二部服部裁判長係で開かれる。

本組織裁判のごとく前回公判において、服部裁判長は四月二十八日に予定されていた第十回公判延期の理由について、「当日、過激派が官公庁を包囲するとの情報があった」「四・二八ともいわれてもピンとこなかった。」等々と言明しつつも、弁護団の何故破防法は弾圧事件であるのかという質問に全く答えることができずに遁走する態度にたいして「なマリナサイ」などと逆に居直るしまつであったのである。

更に弁護人から同日は68年10・21防衛庁裁判や東大事件の公判が開廷されていた事実を暴露されるや、動揺し弁護団、被告団の前になすすべがなかったのである。

こうした今日の裁判所の姿、すなわち警備の保障が出来なければ、裁判が開けないといった裁判所の態度は破防法に対して、偏見と予断に満ちていることを暴露したものである。

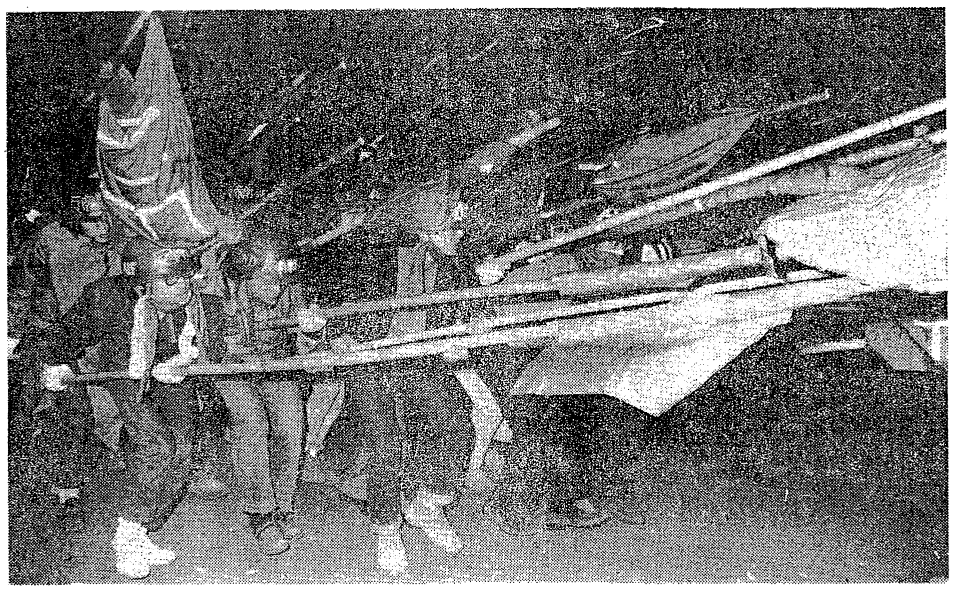
そしてこのことは看守問題、特別弁護人問題においても、服部裁判長の行政権力（看守、検事）に対する屈服と迎合という形で表われている。昨年七月二十日の第一回公判以来、我々は東大裁判以降の露骨な裁判の反動化を弾劾し、公判においても、弁護団、被告団と共に服部裁判長の不当な訴訟指揮を粉砕してきたのである。

破防法第十一回公判は公判開始以来、満一周年を記念する日でもあり、特別弁護人、求釈明といった問題を含めて、今後の裁判闘争を進める中で重要な位置をしめているのである。六月返還協定調印阻止闘争を闘い抜いた全ての労働者、学生、市民諸君！権力が破防法弾圧体制を強化し、我々の闘いを圧殺しようと企てようとも、我々の闘争は弾圧にひるむことなく前進していくことは明白である。

七月二十一日破防法第十一回公判に結集せよ！

写真

右から反帝戦線結成大会、両国公会堂七月二十六日・第一回破防法公判闘争、東京地裁前・左上、全国叛軍連絡会議結成大会、新潟現地十二月九日・右下、十・二一防衛庁闘争へ進撃する反帝戦線・左下、十一、一自衛隊パレード粉砕闘争

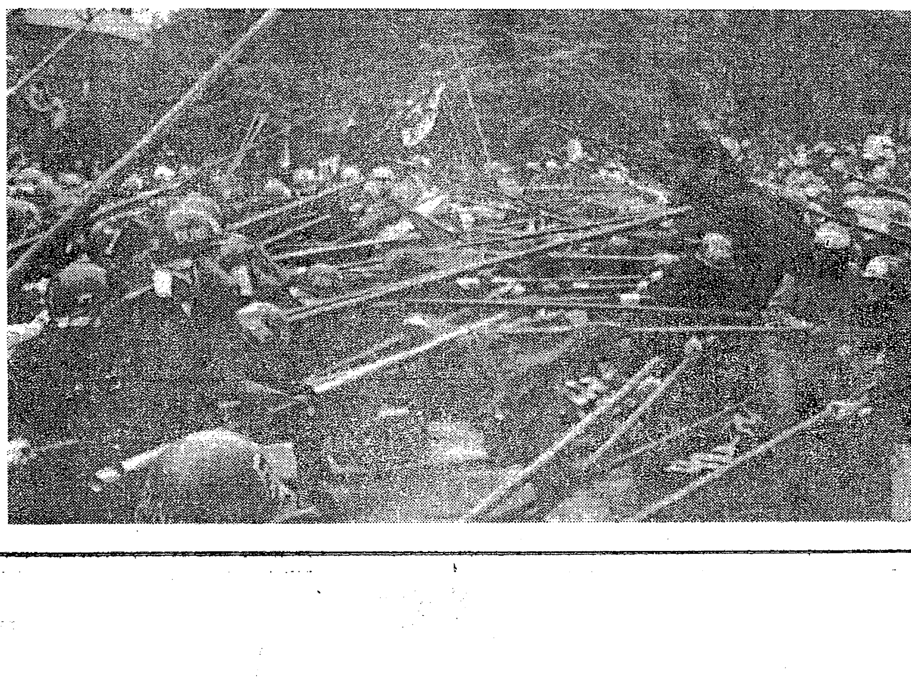


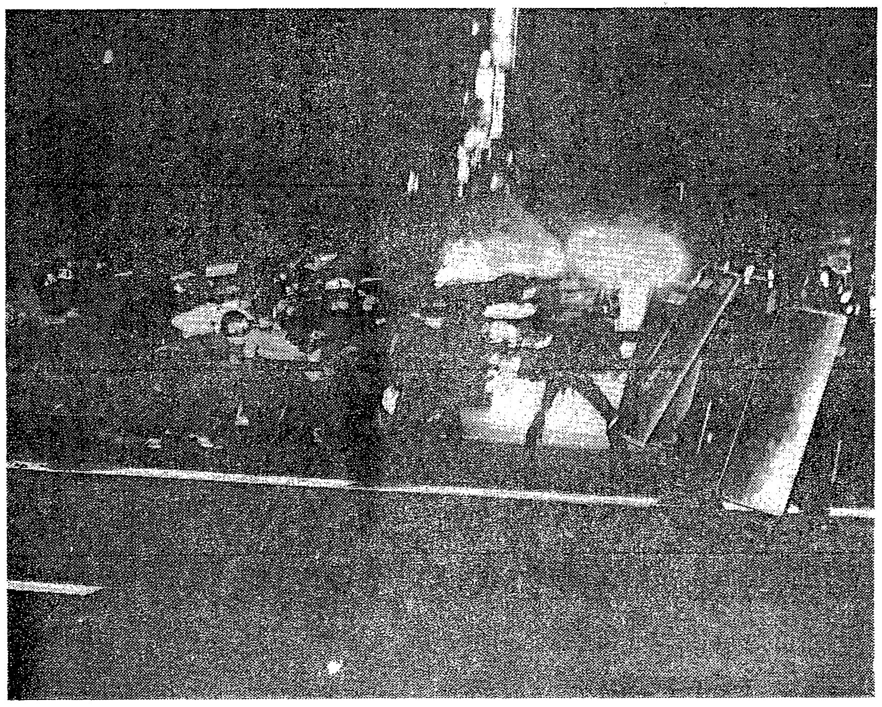
日本反帝戦線

AIF

一年間の闘い

日本反帝戦線結成大会	七月二五日－二六日
日「韓」協力委粉砕闘争	八月四日
渡航制限撤廃闘争	八月二〇日
関東大震災四九周年入管闘争	九月一日
中曽根訪米阻止現地闘争	九月八日
防衛庁、全国基地解体闘争	九月一九日
小西叛軍裁判闘争	九月二五日
中曽根訪沖阻止緊急行動	十月七日
羽田、三周年記念闘争	十月八日
佐藤訪米阻止闘争	十月一八日
防衛庁闘争	十月二一日
第三回小西公判闘争（東京－新潟）	十月二八－二九日
自衛隊パレード粉砕闘争	十一月一日
沖縄国政参加選挙粉砕闘争	十一月一五日
日米共同声明一周年闘争	十一月二二日
三里塚空港粉砕総決起集会（現地）	十二月六日
全国叛軍連絡会議結成大会（新潟）	十二月九日
日韓条約批准五周年入管闘争	十二月一八日
柴野君虐殺抗議追悼集会	十二月二六日
日「韓」法的地位協定粉砕闘争	一月一三日
東大安田決戦二周年闘争	一月一八日
入管阻止第二派緊急行動	一月二二日
第二回全国叛軍連絡会議	一月二八日
沖縄とともに闘う中央集会	二月四日
紀元節粉砕闘争	二月十一日
三里塚、第一次収用実力阻止現地闘争	二月二二日－三月六日
第三回全国叛軍連絡会議	二月二八日
万歳革命五二周年・入管闘争	三月一日
全軍労スト支援闘争	三月二日
三里塚闘争	三月一三日
劉君支援・入管闘争	三月二七日
反医学会総会闘争	四月五日
三里塚北富士連帯中央闘争	四月六日
全軍労県労協スト支援沖縄闘争	四月一五日
「韓」国学生革命十一周年闘争	四月一九日
沖縄闘争	四月二八日
第四回全国叛軍連絡会議	五月九日
返還協定調印実力阻止闘争	五月一九日、二九日～三〇日 六月一五日、一七日
三里塚闘争	六月六日
佐藤訪韓阻止闘争	六月三〇日～七月一日





写真

右上、反帝戦線武装宣伝隊五戦士外務省へ突入！・右下、四・二八闘争で野合派を粉砕する反帝戦線（左側）・左上、三里塚第一次強制収用阻止決戦、機動隊との激突を貫徹・左下、沖縄返還協定調印阻止闘争、六月一七日反帝戦線部隊は機動隊を撃破して渋谷一帯を制圧

日本反帝戦線第二回大会によせて

獄中同志からの連帯アピール

第二回大会を圧倒的に克ち取れ

5・29外務省突入闘争被告

伊達　ひとみ（順天堂大学病院看護婦）

沖縄返還協定調印実力阻止闘争を反革命ー国際反革命同盟の背景、革命的に闘い抜いた全国の労働者、学生諸君！

恒常的武装闘争の下、70年代権力闘争の新地平を切り拓く、その最先頭を担う反帝戦線、救援行動委員会の同志諸君！

5／29を闘い抜いた者より獄中からの闘いの連帯の挨拶を送りたいと考えます。あの60年代後半における闘争が大衆の圧倒的高揚を出現させつつ、69年の闘争に於ける権力の密集した反革命の前に痛苦な敗北を喫せざるを得なかったこと、この60年代階級闘争の総括こそが70年代権力闘争の実現を左右するポイントだったと考えます。由にそれをめぐる諸党派の動揺、混迷、低滞と、我が同盟内分派ー党派闘争はさけられぬ道として闘かれていたのだと思います。

すなわち、六〇年代の大衆武装カンパニア闘争の敗北は、権力奪取ー武装蜂起を実現出来る党の質と軍事の質を要求したからであったと考えます。連合党としての第2次BUNDを、赤軍派、叛旗、情況派、[illegible]会三派と日和見主義者共を排除しつつ、二年有余にわたった「党の革命」とは、理論的、組織的な一切のアイマイさを許さぬものであったと考えます。我々は「党の革命」の最後的完遂を四・二八「蜂起・戦争派」なるものとの党派闘争において「軍事を孕み、共産主義を組織する」全国単一党の建設をめざし、勝利的に貫徹した。この勝利は、偶然的なものではなくて、当然の勝利なのであり、この「党の革命」を外で一切認識できぬ諸党派が混迷を続けているのも当然なのである。

五・二九、三〇の沖縄闘争を突破口に続いて六月一五ー一七闘争は「党の革命」の成果を踏まえ、常に提起されて来たところの恒武闘争の第一歩の革命的展開であったことが確認できると考えます。現代過渡期世界における帝国主義の動向が統一世界市場防衛を共同強化として推進している中、日帝はその基調的路線を、経済外交路線として、七一年沖縄返還協定調印、七二年自衛隊派兵をもって貫徹せんとしている。沖縄は日米共同反革命前線基地化として位置づけられるのであり、我々は日米共同反革命前線の基地化阻止の闘いとして、日帝の経済外交路線に真向から対決する反帝的武装闘争、即、帝国主義軍隊解体！革命の拠点建設！地区共闘ーソビエト型組織建設！の内実をもつ闘いとして貫徹されて来たものと確認出来ると考えます。

混迷を続け、四・二八に見られた階級戦線内部の「蜂起・赤軍派」そして社会革命主義派と、大きく二つの潮流に反帝統一戦線の革命的再編が分かれていることを表現している。我々は六十年代階級闘争の失敗の総括による大衆の水ぶくれをもって革命を夢想するものでは決してない。我々の反帝統一戦線の再編とは蜂起を実現するために準備されるソヴィエト型組織建設を射程に入れたところの現在的任務であり、唯一反帝戦線の手によって遂行されることをはっきりと確認しうると考えます。

一労働者である私は、五・二九闘争を常に労働者の立場としてではなく、階級闘争を担う一人として闘いました。個人の決意一変では当然にも革命の実現はできないこと、理論的にも、実践的にも大衆の一歩前を進み、そしてどんなことがあっても[illegible]党の細胞が、革命を唯一領導しうる[illegible]網の目の様に組織された前衛のだという事を確認しうると思います。

先進的労働者の皆様！今春闘を闘った国鉄労働者に対して当局ははかってない程の大量処分を発表したと聞きます。我々は権力が日帝外交路線にそって、国内でも帝国主義的国内再編を常に推し進め、反革命階級体制をかためてきています。それでも我々は、屈服する事なく、革命に向けた準備を推し進めていこうではありませんか！

○日本反帝戦線第2回大会万才！

○蜂起プロ独派をめざす新しい潮流を領導する第三次BUND・反帝戦線万才！

○革共同両派との熾烈な党派闘争を克ち取れ！

昭和四六年七月八日東拘在監

全同志と革命的連帯を！

4・5反医学会総会闘争被告

佐藤　恵（国学院大学生）

日本反帝戦線第二回大会を圧倒的にかちとるべく全国から結集された革命的な戦士諸君、兄弟達！

今や我々は苦しかった「冬の時代」にはっきりと別れをつげ、「死に至る病」に苦悶する帝国主義ブルジョアジーを最後的に墓場へと追いやる世界革命への胎動を開始した。

二年有余にわたる熾烈な「党の革命」が今春四・二八安保沖縄闘争において、多くのプロレタリア革命戦士の血を犠牲にし、革命的ブントの党的団結を唯一わが第三次ブントーATFが継承することをもって完遂されたことをしる時、我々ははっきりとその意義を確認することができる。

六九年以降のこの長く苦しかった闘いは、我々に多くのことを教えた。それは「政治過程論」的、共同体論的戦術の無謀であり、観念的武闘主義の無駄であり無益であるということである。それらは今、ただ「死出の道」を歩くこととしか何の方策も持ちえないことは余りにも当然であると言えるであろう。我々はかかる教訓を血肉化し、そしてそれらを止揚しうる「軍事を孕み共産主義を組織する党」の建設にまい進していかなければならない。

戦士諸君、兄弟達！日帝ブルジョアジーの沖縄返還協定策動は二五年間の[illegible]支配に苦悶する沖縄県民プロレタリアートを売渡するものに他ならず、それは「返還」どころか、東南アジアへ向けた侵略反革命の第一歩であることを自ら暴露したものであった。

日本人民の血の税金で武装した自衛隊の公然たる沖縄派兵こそはその明らかな証左である。インドシナで敗退に敗退を重ねた米帝国主義の死の喘ぎたるグアム・ドクトリンに対応した日米共同声明は、こうしてその本質を露わにし着々と具体化されているのである。それはまさに、現代過渡期世界に規定されつつ進行するものであることを見ておかねばならない。

そして、このことを我々の闘いの方向性として対象化するとき、明確に「日米共同反革命前線基地化阻止！」として提出されて、初めて有効であるといえるだろう。

我々はかかる闘いを、沖縄においてその無条件にかかわらず、非和解的に闘いぬいている沖縄人民プロレタリアートと連帯すべく、本土ー沖縄を貫くプロ独政府の実現をめざし、今春沖縄闘争を恒常的武装闘争の旗の下、終始、戦闘的に闘いぬいたことを確認しようではないか。

獄中にあっても我々は常にかかる革命的な闘いと呼応し、常にそれを担った同志と共にあったことを報告したい。五・二九は外務省であり、五・三〇は日比谷であり更に六・一七に渋谷での炎の中であった。

このような我々の圧倒的な闘いに比し、ますます混迷を続け、動揺を深める諸党派が存在している。とりわけ沖縄「返還」に[illegible]的に闘争する革共同中核派の犯罪ぶりを糾弾する必要があるだろう。彼等は、日本帝国主義と共闘して沖縄を反革命前線基地化へと再編していることを見抜けず、そのブルジョア民族主義的路線は、そのような日帝の動向と対決しえないことは言うまでもない。それは日共の「真の返還運動」以上ではないことを確認すれば足りるだろう。

そしてこの中核派に即自的に対立した解放派の沖縄闘争は、最近に至るほど、我々の方針を真似てはいるが、相変わらず本質を実体と二重化させるという、全くの社会革命主義である。

我々は、今春沖縄闘争をめぐって尚一層、その動揺を深めているかかる諸潮流を「蜂起・プロ独派」形成をめざしてゆくことが、現在の我々の第一義的な課題と言っても良いだろう。

我々は行動的実存に於ける革命前衛の任務が、蜂起に向けた主体的、客体的条件の創出であることを明確に踏まえ、その政治路線たる非常・拠点・自衛隊解体、ソビエト型組織創出に表現される恒常的武装闘争をもって圧倒的に闘い抜くだろう。

かかることを確認する時、この日本反帝戦線第二回大会を圧倒的に克ち取ることこそ最も重要なことである。

真紅のヘルメットの戦士諸君！我々のかかる優れた闘いに敵対した野合右派との最初のゲバルトを闘い抜き、不当にも逮捕され、長期拘留を強いられている我々は現在当局の熾烈な分断策動に抗し、日々弾圧され、排除され続けている全世界プロレタリアの解放へのゆるぎない確信に燃え断乎とした闘いを貫徹することを表明したい。

我がブンドは、六〇年安保の闘い以降、常にあらゆる闘いを先頭に立って闘い抜き、その闘いの赤きヘルメットこそは、まさにブルジョアジーの狂気の弾圧に倒れていった革命的な戦士の血によって染められたのであった。

六七年一〇・八羽田から打ち続く王子・成田・佐世保等における圧倒的な実力武装闘争は、疎外された多くの人民大衆の共感と支持を得、ヴェトナム人民を初めとするインドシナにおける英雄的な人民の反革命侵略者たる米帝とその手先に対する非和解的な民族解放闘争と確固たる連帯をかちとったのである。そして六九年一月東大安田決戦において、あのブルジョア官僚養成所の象徴たる安田講堂に社学同の旗を高々と掲げ、戦闘的ブンド魂をもって闘い抜いたことは改めて確認するまでもないであろう。

我々はかかるブンドの戦闘性をはっきりと継承し全世界プロレタリアートの前衛の名にかけて、三世紀近くも世界に君臨しつづける横暴なブルジョア共と全世界プロレタリア人民を裏切ることをもって延命しているスターリニスト共を挟撃し、真にプロレタリア解放実現にむけ進撃しよう。我々は、かかるプロレタリア解放の偉大な事業に参加することこそ、我々の生涯における一切であることを[illegible]している。我々は獄中で死に到れることを決して恐れはしない。それは我々の闘いをうけつぐ、より優れた戦士達がつぎからつぎへとあらわれることを知っているからだ。

我々は失うべき何物も持っていはしない。最も革命的な戦士諸君、兄弟達！

あらゆる障害をはねのけ、断乎として反帝戦線第二回大会をかちとり、共に進撃しよう！敵に怒りを！同胞に愛を！

○日本反帝戦線第二回大会万歳！

○革共同を打倒せよ！「蜂起・プロ独派」万歳！

○暴力革命万歳！

昭和四六年七月七日東拘在監

第二回大会で巨大な前進を！

5・29外務省突入闘争被告

江木　義昭（中央大学生）

全国の最も先進的・革命的な戦闘者諸君!!そして真紅のヘルメットで武装された全ての反帝戦線・救援行動委員会の諸君!!

七月十六・十七両日に亘って、まさに革命的に克ちとられんとしているところの日本反帝戦線第二回大会へむけた、我々、日本反帝戦線武装突撃隊よりの熱烈なる連帯の挨拶を送りたい。

五月二九日より六月一七日に至るまでの、あの熾烈なる武装闘争「沖縄返還協定調印実力阻止」の闘いは、いったいいかなるものとしてあったのか。また、今回の二連闘争にあって、わが日本反帝戦線こそが最も革命的、戦闘的な、最も突出した闘いを組織しうる唯一の部隊としてあった、その事の有する意味は何なのか。まずもってそうした問題を、全ての同志諸君と共に確認してゆきたい。

まさに六九年におけるあの痛苦な敗北、六十年代後半の日本社会を大きく揺り動かし、日本階級闘争の巨大な前進を克ち取った我々革命的左翼の闘い。その闘いの偉大さ巨大さゆえに、自からの手で生み出した巨大な反革命の壁。その壁を突破することを成し得ず、全ての党派が、この敗北を契機に、ついえ去っていったのであった。わが共産同ー社学同にあっては、まさにその六〇年代後半の偉大な闘いを、最も革命的、戦闘的に担って来たが故に、その身に受けた打撃も、巨大なものであった。六九年秋の[illegible]の脱落を契機として、九年来の第二次共産同の受けた傷は、その組織の四分五裂、空中分解として現出したのであった。

しかし六〇年安保ブント以来のその革命魂を受け継ぐ我々は六九年におけるその痛苦な敗北を総括し、まさしく「党の革命」の遂行として、自からの敗北を対象化してきたのであった。そして、その「党の革命」という実に苦渋に満ちた闘いをも、我々は革命に向けた揺ぎのない信念によって、ついに、本年四・二八沖縄闘争における野合右派の[illegible]をもって完遂し切ったのであった。そして我々はまさに新共産同ー社学同ー第三次共産同を創造し得る唯一の部分、すなわち日本革命ー世界同時革命を完遂し得る唯一の部分として今日の「沖縄返還協定調印実力阻止闘争」を迎えたのであった。

ここにおける我々の闘いは、まさに日本階級闘争史上、画期的意義を有するものとして、全てのプロレタリア人民の眼に、刻印されたのであった。すなわち、[illegible]なるデモ隊列をもって機動隊に対峙していった公然部隊、それと同時に公然部隊の支援を受けつつ、Z部隊を展開し切った非公然部隊の有機的結合というその軍事面での組織力。まさにそれは、六九年において全党派がぶつかり、そして乗り越え得ないものとしてあった壁を・見事に乗り越えるものとしてあったのである。

六九年以降における日本階級闘争の冬の時代、痛苦に満ちた時代と、真摯な総括と、それを踏まえた組織活動によって、実に前進し続けてきた我々であったればこそ、こうした闘いは組織し得たのであった。二年有余にも及ぶ、気の狂わんばかりの苦悩と苦痛に満ちた「党の革命」それを貫徹し切った我々反帝戦線の勇士は、まさに日本階級闘争、戦線の中に不抜の位置を築きあげたのであった。

同時に五・二九～六・一七の闘いの過程を見る時、そこにおける諸党派の混迷、動揺するさまがあまりにも明らかとなったのである。とりわけ、五・三〇を頂点とする八派共闘の、空中分解という事態に対し、明確な方針を提起し得たのは、以前より、反帝統一戦線の地区ソビエト型組織への再編を提起していた我々共産同のみであり、他の諸派はこうした事態、中核派が八派共闘としての自己保身のために運動での右傾化を行い、人民戦線左派へと転落してゆき、また革[illegible]がこうした中核派に対して小ブル急進主義をもっての反対路線し、他の諸派は何らなす術も見出せずに、茫然自失している中にあった。我々の存在は実に重要な意味をもつものとして確認しなければならないであろう。

すなわち、反帝統一戦線の[illegible]な再編過程にあって、中核ー人民戦線左派、青解ー社会革命主義派、そして野合右派、アカ派等の即自的武装蜂起派と言った諸々の潮流に対し、我々はまさしく「恒常的武装闘争」によって明確にされているところの「党・ソビエト型組織建設」という、まさに力関係ー武装蜂起を射程に入れたところの統一戦線の方針を、全ての闘う人民の前に明示し、真の革命派、「蜂起ープロ独」へと全人民、プロレタリアートを領導していくという大いなる任務を果たさねばならない。

こうした巨大なる歴史の転換時点によって日本反帝戦線第二回大会が開かれることは、実に画期的意義を有していることとして、我々に、その成功を是が非でも克ちとらねばならないであろう。

我々、日本反帝戦線武装突撃隊は、現在獄中にあり、その歴史的な大会に出席し得ないことを、実に残念に思うのではあるが、しかし、その大会の成功を確信・獄中にある我々と獄外との固い固い連帯を確認し、再び[illegible]のもとへ、階級闘争の最前線へと、復帰し得る日を期して、日々自からの鍛錬を怠ることなく、また権力に対するところの獄中闘争を一歩たりとも退く事なく闘い続けるであろうことを、ここに決意表明し、本文の結びとしたい。

○日本反帝戦線第二回大会万歳！

○「蜂起ープロ独派」を形成・領導する共産同ー反帝戦線万歳！

○日共ー民青、革共同両派との党派闘争に勝利しぬき、共産同を真の前衛へ

昭和四六年七月八日東拘在監

大会を更なる恒武闘争の拡大へ

4・5反医学会総会闘争被告

岸野　義昭（東海大学生）

七〇年代階級闘争を権力闘争へと高めるべく、日夜、恒常的武装闘争を闘いぬいている各戦線・救援行動委員会の兄弟達！反帝統一戦線の同志諸君！日本反帝戦線第二回大会開催にあたり、獄中より連帯の挨拶を送ります。

六九年四・二八、一〇、十一月闘争の敗北は我々に、六〇年代階級闘争、すなわち大衆的実力カンパニア闘争の終焉を告げるものであった。我々はこの敗北を真に受けとめ総括したからこそ四・二八日比谷において「党の革命」を最後的に完遂できた、ということを確認しなければならない。そのことは、六〇年代階級闘争の限界を我々は、大衆武装の質に規定され続けてきた階級闘争主体そのものの限界として見出す中から、武装蜂起の実現にむけた党への飛躍として、軍事機能を党の組織構造へと具体化するものとして明らかにしたからこそ、四・二八ブント系脱落諸派との党派闘争に勝利し、六・一五ー一七へ至る闘争において火炎ビン闘争と機動隊との正面戦（恒常的武装闘争への突入）を闘いぬきえたということである。

「党の革命」の推進の前に脱落していったブント系諸派は、もはや自己を合理化することによってのみ生きながらえているのである。「赤軍」派は、大衆の自然発生性に依拠しつつ、戦術の悪無限的闘争によって革命を歩実するあの悪しき政治過程論から一歩もぬけ出ることが出来ず、非専門軍事主義よろしく、マスコミ受けを狙って名をあげることのみを唯一、生きがいとしているのである。一方軍事に対し、叛旗・情況派は、[illegible]運動に独自の意味付与を行い、三里塚においては「共同体への迂」などと称してアブアブの社会革命主義者となり、マルクス主義とは縁もゆかりもないことは明白であり、もはや我々の相手ではない。また野合右派は、四・二八[illegible]よろしく、蜂起ー戦争をデッチ上げ「権力と見えない」ことを合理化し「〇〇一派[illegible]」のみを階級闘争とし、日比谷において我々に対して、ゲバルトをしかけてきたが、逆に我々によって粉々に粉砕されたのであり、そして、関西の池へ逃げ帰りまたタコツボ化を開始したのである。

反帝統一戦線の四・二八の勝利によって最終的に「党の革命」を完遂した我々は、五・二九・三〇、六・一五ー一七に至る沖縄返還協定調印阻止闘争を公然ー非公然武装として突破し、この沖縄闘争によって七〇年代階級闘争ーー前衛的武装闘争へと突入したのである。そして六七年一〇・八羽田闘争ーエンプラー王子ー成田へと続いた実力闘争を常に先頭で闘いぬいた栄光的なブンド魂はよみがえったのである。

六・一五、直接的には中核派と社青同解放派とのゲバルトによる八派共闘の解体は、その「主流派」である中核派の運動的な全共闘ー反帝へのしがみつきにより、七〇年代階級闘争をいかに発展させていくかということを、いっさい展開しなかったがゆえに、八派共闘は解体したのである。

我々は八派共闘を地区共闘ーソビエト型組織へと再編していかなくてはならない。このことを全国戦線によって六・一五ー一七闘争において展開した。[illegible]を粉砕した八派共闘を、新たな潮流すなわち蜂起ープロ独派として再編ー止揚していかなくてはならないことを示している。

沖縄闘争において、「奪還」を叫び続ける中核派は、マルクス主義の基本であるプロレタリア国際主義から離反し、民族主義ー一国主義に転落してしまっているのである。そもそも沖縄闘争において「奪還」とか「解放」などを主張することは、ブルジョアジーのわくの中で闘っているのであり、その限界が生じるや否や破産するのは明白である。世界の情勢から沖縄を位置づけることなくして沖縄闘争はありえないのである。

このことをぬきにして沖縄を言ることは一国主義へと転落することは明らかである。ベトナム戦争による米帝の敗北は、ニクソン・ドクトリンにより、米帝の東南アジアから一定程度の後退としてあり、そして日米共同声明により、日帝は明確に軍事外交路線を打ち出し、米帝の東南アジアに対する[illegible]をになえるパートナーとして、東南アジアに侵略反革命を開始しようとしているのである。そうであるから「本土」ー沖縄を貫くプロ独、日米両帝国主義の共同反革命前線基地化阻止の旗幟を鮮明にすることによってのみ、沖縄闘争に勝利することができるのである。

全国の先進的労働者、学生諸君／救援行動委員会の兄弟諸君、反帝戦線の同志諸君！

今や我々は「党の革命」を完遂し、七〇年代階級闘争を本格的武装闘争ー恒常的武装闘争の地平に立つことができた。国家権力は二・一一以後我々に対して破防法的弾圧を加えてきたが、権力が弾圧を加えれば加えるほど我々は強固になる。もし、[illegible]でも手をくめるようなことがあったら、それすら逆手にとって、さらに強固になるであろう。

○日本反帝戦線第二回大会万歳！

○「蜂起ープロ独派」をめざすブント、反帝戦線万歳！

○革共同両派を打倒し、ブントを唯一の革命的前衛党へ。

七月六日、東京拘置所にて

「蜂起・プロ独」派の創出を！

4・5反医学会総会闘争被告

吉崎　義人（武蔵野美術大学生）

すべての革命的同志諸君！とりわけ沖縄返還協定調印阻止闘争を、「党の革命」を貫徹し、いま世界階級闘争の前面として颯爽と登場した第三次共産同に領導され、あらゆる日和見党派を尻目に最も革命的に闘い抜いた反帝戦線・救援行動委員会の同志諸君！

4・5反医学会総会闘争以後を権力の狂気じみた弾圧により獄中闘争として闘い抜かなければならない状態にある、反帝戦線の一戦士より反帝戦線第二回大会にたいする決意表明を送りたいと思います。

六〇年代階級闘争の敗北を、権力の弾圧をのりこえうるレーニン主義党組織の獲得と、階級闘争の推進構造ー地区共闘・ソビエト型組織の創出として総括し、さらには非合法非公然部隊ー革命の軍事を党組織論に孕ませることによって軍事を具体化した第三次共産同によって確立された反帝統一戦線は、四・二八において「党の革命」を実践的に迎え、沖縄返還協定調印阻止闘争を媒介として「党としての闘い」を闘いぬくべき地平へとたっている。他方六〇年代階級闘争の総括をなんらなしえない諸党派は[illegible]をくり返している。

彼らにあっては、現代過渡期世界における帝国主義の動向と、階級闘争を闘い抜く主体の成熟がどこまでなされているのかが、まったく自覚されていない。

過渡期社会の存在と国内階級闘争の激化に規定されて日本帝国主義は六九年日米共同声明以降、アメリカ帝国主義と共同して侵略反革命を遂行すべく、現存のあらゆる陣営を帝国主義的再編として推進せんとしているのである。

自衛隊の発動もその一つである。それは運輸通信部門の帝国主義的再編として、日本帝国主義のアジアに向けた帝国主義外交路線を下部構造から一体的に確立しようとすることのあらわれである。労働戦線の帝国主義的再編もそうである。そして、七二年沖縄返還も帝国主義総路線の再編強化＝日米共同反革命前線基地化としてあるのであり、中核派の言う「沖縄奪還」における[illegible]にはないのである。

さらに以上の帝国主義者の動向と対決して行く[illegible]に提起することによって、七〇年代階級闘争の[illegible]一方で「蜂起・赤軍派」を[illegible]た。彼らは都市ゲリラを[illegible]

われわれは、その後、恒常的武装闘争の展開を、蜂起の陣型の構築として実現している。各地反戦行動委員会を媒介に、全国反戦ー総会を経て、更には、八派共闘の解体ー革命的再編を沖縄返還協定調印阻止闘争を最も革命的に闘い抜くことにより、具体的に開始している。

全ての革命的同志諸君！現代過渡期世界における帝国主義者の動向は、レーニン帝国主義論でもって直接規定できるようなものではなく、政治・経済の一体化したものとして存在しているのである。われわれはこの帝国主義者の動向を粉砕し、三ブロック階級闘争を領導し、世界共産主義の勝利へむけて前進してゆかなければならない。それに唯一対決できる[illegible]国同時革命、戦略に規定された恒常的武装闘争ー帝国主義軍隊解体・非常事態・地区共闘＝ソビエト型組織の建設としていまや革命的マルクス主義と無縁の存在である革共同両派との党派闘争を貫徹し、「蜂起・プロ独派」を創出しなければならない。

以上のことを反帝戦線第二回大会において確認し、秋の協定批准、また七二年自衛隊派兵阻止の陣型をともに構築していこうではないか。

○革共同両派を打倒し、BUNDを前衛へ！

○「蜂起・プロ独派」をめざす新しい潮流を革命的に領導せよ！

○日本反帝戦線第二回大会万才！

（昭和四六年七月八日東拘在監）

沖縄「返還」をめぐる

日米共同反革命の急展開

さる六月二十九日午後三時より、外務省で日米帝国間において、沖縄「返還」後の沖縄防衛という名目をもって、日米安保協議委員会が開かれ、愛知外相、中曽根防衛庁長官とマイヤー駐日大使、マッケーン太平洋軍総司令官の会議の下復帰後の自衛隊の沖縄配備計画についての合意書が、防衛庁久保防衛局長と米大使館カーチス海軍中将（沖縄交渉団首席軍事代表）の署名をもって取られた。「日本国による沖縄局地防衛責務の引受けに関する取決め」がそれである。以下この「取決め」の条文の内容を検討するなかから、ますます具体化される沖縄の日米共同反革命前線基地化の実態を暴露してゆかねばならない。

6・29安保協議委の「取りきめ」にみられる沖縄返還の実体

「取り決め」の[illegible]内容

この「取りきめ」の内容は、六月二六日付けの毎日新聞朝刊の報道でも明らかな如く、日本側が決定した沖縄への自衛隊配置計画を中心にしたもので、事実上、日米帝政府間「協定」の形式で合意書がとりかわされたものである。

これは米帝側の危惧、即ち、沖縄「返還」に伴う沖縄米軍基地の機能低下の恐れを、両国間の明確な合意書のとりかわしをもって、更なる米軍基地を維持、強化し共同反革命の拠点たる沖縄の位置の再確認と強固な意志統一を行ったものに他ならない。

では一体、その「とり決め」の具体的内容ー自衛隊配備計画とは一体いかなるものなのかをみていくことにする。

「とりきめ」の条文は七項目からなっている。

❶日本による沖縄の直接局地防衛任務を引き受ける。すなわち、陸上防衛、防空、海上しょう戒及び防衛庁がその任にあたる捜索・救難を引き受ける。

❷日本による「肩代り」の時期は一九七三年七月一日までとし、最初の自衛隊配置は、「返還」後約六カ月以内に陸、海、空、合わせて三千二百人の部隊を派遣配置し、一九七三年七月一日までに地対空ミサイル防空を実施し、航空警戒管制組織を運用するために、ナイキ群一、ホーク群一および適当な支援要員を派遣する。

❸施設＝（イ）那覇空港に航空自衛隊及び陸上自衛隊の航空隊、海上自衛隊の対潜しょう戒隊を配置、（ロ）那覇ホイール＝陸上自衛隊の部隊及び必要に応じて自衛隊部隊を配置、（ハ）ホワイト・ビーチ及び那覇軍港に海上自衛隊の部隊、桟橋、集荷場、その他の施設に配置する。

❹防空＝（A）航空自衛隊は復帰日、又はその直後に配置し、復帰日から六ケ月以内にF104J航空機による防空警戒待機を引きうけ、一九七三年七月一日までに航空警戒管制組織の運用をひきうける（B）航空自衛隊のナイキ群と陸上自衛隊のホーク群は一九七三年七月一日までに地対空ミサイル防空任務を引きうけるよう沖縄に配置する。（C）沖縄の防空の運用責任は一九七三年七月一日までは米空軍が行い、それ以降は共同運用すること。

❺沖縄の防空の早期肩代りできるように、基礎的な航空管制組織と、ナイキ、ホーク地対空ミサイル組織を、別記明細の価格と条件で防衛庁が買い入れ、又米国が米国防総省を通じてその旨を申し出ること

❻陸上防衛、海上しょう戒および、捜索、救難を自衛隊は沖縄において「返還」日より六ケ月以内に出来るよう、自衛隊と米国軍隊間でそのための詳細な計画を準備する

❼以上の自衛隊の肩代りと、その配置計画を実行するために防衛庁と米国防総省間でその手続きをとりまとめる事。

以上「取りきめ」の内容を事かんくわしくみてきたわけだが、この七項目を読めば明らかな如く、沖縄防衛という言葉が色あせてしまうほど、日米共同軍事戦略ー極東における反革命軍事拠点沖縄の維持・強化が目論まれていることがわかるであろう。更には、この「取りきめ」文にみられる自衛隊の配置計画が米軍基地としての沖縄基地の補完としてあることがみてとれる。

沖縄の日米共同反革命前線基地化の具体的展開

六九年日米共同声明の基調が、この条文に如実に、かつ具体的に表わされているのである。前旗紙上においても、あの沖縄「返還」交渉の内実がいかなるものであったのかを暴露してきたわけだが、この安保協において更に詳細・緊密な内容が、「返還協定」調印の強行のすぐ後に、これまた、協定「附随一部」という"形をとって合意された事からも、まさに沖縄「返還」の意味するものが何なのか、が明確にわかるであろう。

沖縄「返還」に関する交渉協定調印が一貫して、日米共同反革命軍事協定として行われている事。この間とりきめの内容も、米帝の軍事基地機能の絶対的保持・強化として自衛隊配置計画が目論まれているのである。それは沖縄「返還協定」交渉において明らかにされた「労働者国家」群へ対しての諜報破壊工作を行っている特殊部隊の存続、VOAの存続、更に核有事もちこみの暗黙的了解等、そして、この「取りきめ」が、地上防衛、防空、海上防衛しょう戒と捜索、救難など、沖縄を中心とする防空識別圏（ADIZ）内での防空警戒管制と周辺海域の警備を主要な自衛隊の任務として合意されているのである。

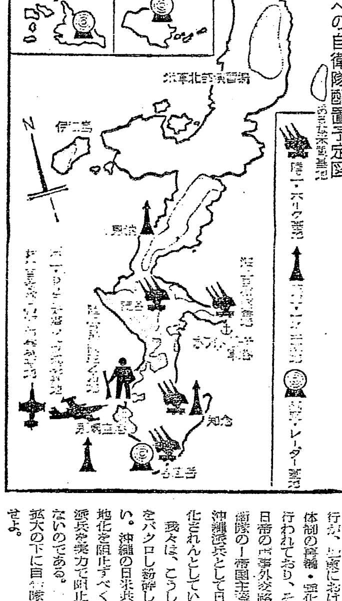
まさしく沖縄は「本土」に復帰するのでもなく、まして"返還"されるのでもないのである。施政権が返ろうと返るまいとにかかわらず、沖縄「返還」が意味するものは、東南アジアにおける帝国主義反革命戦略の推行の為のその共同反革命前線基地化として推し進められているのである。更につけくわえるならば、「本土」における米軍基地の再編の実体を暴露しておかねばならない。毎日六月二六日付けの朝刊にくわしく報道されているが、板付、三沢、立川、座間、三沢基地の日米共同使用の決定である。さる六月二五日、この日の日米安保協議委で決定された在日米軍を中心にした実戦部隊の大幅撤収にともなう措置が、民間に返還される区域は板付を除いてはごく一部しかなく大部分は自衛隊の肩替りのもとで日米共同使用の形がとられたことである。

これは昨年、中曽根が渡米し、レアード国防長官との会談において確認された"都市周辺部の米軍基地の整理と民間に転用する方針"」とは裏腹に日本は極東防衛の拠点として有事には基地を再使用する権利を有した」とする米帝の発言からも、この大幅撤収が意味するものが、まさしく、あのニクソン・グアムドクトリンにそった有事駐留体制の一つとしてあり米帝の再使用を認めたところの、一部自衛隊の肩替りをとった、日米共同使用としてあるのである。

（詳しくは毎日新聞六月二六日付朝刊を参照）

この間の沖縄「返還協定」調印そしてこの日米安保協議委の取りきめ、七月一日、佐藤訪米、レアード国防長官の来日（七月四日〜十一日まで）及び訪韓、八月米第七艦隊・エンタープライズの横須賀寄港、一連のブルジョアジーのスケジュールの中に、急テンポで進行する沖縄「返還」の具体的進行が、広範における、共同反革命体制の再編・強化の具体化として行われており、そのもとにおける日帝の軍事外交路線の貫徹が、自衛隊のー帝国主義軍隊としての一沖縄派兵として日々、着々と現実化されんとしているのである。

我々は、こうした日米帝の策動をバクロし粉砕しなければならない。沖縄の日米共同反革命前線基地化を阻止すべく、自衛隊の沖縄派兵を実力で阻止しなければならないのである。武装闘争の更なる拡大の下に自衛隊派兵阻止に決起せよ。



沖縄への自衛隊配置予定図

老人行動隊長菅沢さん逝去す

三里塚第一次決戦を非妥協的に闘い抜き、第二次決戦に恐怖する権力ー公団のあらゆる恫喝、テロ・リンチを敢然とはねのけ、九、十月の決戦にむけ、一歩もひるむことなく、反対同盟の先頭で闘い抜いてきた老人行動隊長菅沢さんの葬儀が、※七月九日反対同盟とそれに連帯する全ての闘う人民の、権力への悪魔の如き憎悪と、第二次決戦への決意をこめて厳しゆくに行なわれたことをここに報告します。菅沢隊長の遺志を受け継ぎ、第一次決戦を数倍する力で、第二次決戦にむけて全ての人民は進撃しなければならない。（詳細次号）

四同志の獄中アピール次号に続き掲載

戦旗販売書店

●東京　ウニタ書舗（神田）▽[illegible]（[illegible]）▽文献堂（早稲田）▽高野書店、うらい書房（池袋）▽吉祥寺ウニタ（吉祥寺）▽マスダ書店（国立）▽アパソン書房（国分寺）▽駒場書店（東大駒場）▽[illegible]（お茶の水）

●神奈川　ルビコン書房（横浜）

●埼玉　アライ書店（浦和）

●大阪　[illegible]書店（北区）

●京都　[illegible]書院（四条河原）▽[illegible]（今出川）▽双璧書房（河原町）

●兵庫　イカロス書房（神戸）

●愛知　名古屋ウニタ（名古屋）

●宮城　八重洲書房（仙台）

●北海道　アテネ書房